

平成27年8月22日(土)

老球の細道157

ああ！ワンハンドシュート

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今日8月15日は70回目の終戦記念日。私が生まれてから今まで戦争もなく無事生きてこられたことを幸運に思う。おかげさまで毎日好きなバスケットボールを思い切り楽しむことができる。平和な世の中とはそういうことである。

先の戦争中はバスケットボールなどやっている余裕はなく、シュートの代わりに銃弾を打っていた。戦後バスケットボールを愛する人たちは、学校、クラブ、職場で武器からボールにすぐに持ち替え、戦争で途絶えていた世界のバスケットボールへも関心を高めた。

そんな折、1950年(昭和25年)3月、ハワイの日系二世バスケットボールチームが来日した。東京、大阪、京都、名古屋で7戦して、日本のバスケットボール愛好者たちに大きな衝撃と刺激を与えて帰って行ったという。まさに「昭和のバスケットボール黒船来航」というところなのか。

ハワイ日系二世チームはドリブル、パス、シュートなどのレベルの高さで日本人の度肝を抜いた。その中でもこのチームが残っていた最大のお土産はワンハンド(片手)のプレーで「ワンハンドシュート」であった。それまで日本のバスケットボールの常識は、ジャンプシュート、ミドルシュートは男子もツーハンド(両手)だった。今思えば、私たちが中学校の頃の指導者である先生方の多くはツーハンドシュートでプレーしていた。だから私も中学2年までツーハンドシュートを打っていた。

ハワイ日系二世チームのワンハンドシュートを目の当たりにした当時の日本人たちは次のように語ったという。

「我々は両手で投げても、なかなか入らないのに、彼らは片手で入れるとは……」。

それまでは外国人は大きな手を持っていて、安定性があるから片手シュートが簡単にできるのだと思い込んでいたが、日本人とさほど変わらない日系二世たちがワンハンドシュート、ワンハンドパスをいとも簡単にやってのけるのを見て思い込みは見事に払拭された。その後、日本のバスケットボールのシュートはワンハンドシュートに移行し、両手のチェストパスが絶対視されていたのがワンハンドパスにも市民権が与えられたのである。

しかし、歴史は残酷である。なぜこの時に日本女子バスケットボールもワンハンドシュートに転換できなかったのだろうか。もしかして「女子だから……」が理由だったのか。戦後70年日本女子バスケットボールも世界の場で何度も戦い、世界のシュートの常識は理解しているだろうに今だに旧態依然である。今までの国際大会で男子以上に好成績を残している歴史が、世界の非常識を「日本の個性」と勘違いしているのだろうか。

坂下ミニバスコーチの二瓶氏は、自分が教えたミニバスの子たちが中学校に進むといつのまにかツーハンドに変わってしまうことに憤りを感じ、自ら中学生を集めて毎週1回「シュート教室」をスタートさせた。最初は坂下ミニバスの卒業生たちが中心だったが、回数を経るごとに坂下地区のみならず若松、喜多方、美里からも意識の高い中学生が集まり、地元の高校生も参加するようになってきた。

このような熱意ある指導者の地道な努力が、いつの日かこの会津地区からシュート革命が起こり、シューティングマシンを輩出するきっかけになることを期待してやまない。